

ブラジル通信第6回

～地球の反対側で根付く日本の野球文化～

第6回の今回は、ブラジルで活動して1年半が経つ中でこれまで見てきたブラジルでの野球・ソフトボール事情について紹介していきたいと思います。

「ブラジルで野球をする人が居るのか？」と思う方もいるかもしれませんが、ちゃんと居ます。私が指導している少年野球チームには約40名の子どもたちが所属していますし、街には大人のチーム、また高齢者のチームもあり、幅広い年代の方々が野球を競技しています。

私も所属している成人野球チームには1990年代に行われたU15やU12の世界大会でブラジル代表として優勝の経験がある方も複数います。その当時の話を聞くと、日本代表には元メジャーリーガーの松坂大輔も選出されており彼からヒットを打ったという方も居ます。

これから、ブラジルの少年野球チームについて紹介していきたいと思いますが、日本だと小学校単位のチームだったり、中・高生となると学校の部活というように学校単位でのチームというのが一般的だと思います。しかしこちらブラジルの学校には部活というのがないので町のクラブチームに所属して競技するというのが一般的です。基本的に1つの町に1つのクラブチームという形です。そのクラブチームの中で年齢ごとにカテゴリーが分かれており、練習や大会もそのカテゴリーごとに分かれて行われています。私が指導する子どもたちは6~12歳が主な対象となっています。日本だとこの年齢層の子どもたちは小学生と一括りになり、一緒に練習・試合をしますが、こちらブラジルではこの6~12歳が3つのカテゴリーに分かれます。1つが6~8歳のティーボール(T-ball)、次が9,10歳のプレインファンチル(Pre-infantil)、3つ目が11,12歳のインファンチル(Infantil)という風に分かれます。カテゴリー毎に、使うボールも違えば、試合のルールも違います。以下に写真と共に、各カテゴリーの特徴を紹介したいと思います。

① ティーボール(T-ball) カテゴリー(6~8歳)



このカテゴリーでは、ピッチャーはいません。写真のようにスタンドティーを使い、バッターはそのボールを打って、走塁を行います。また、ランナーは外野が捕球後、送球した時点で塁間の半分を過ぎていない場合は進塁が認められないというルールがあります。

打者のそばには自チームの指導者が付き、スタンドティーの位置を打者が打ちやすい位置や、打ちたい方向に合わせて調整することができます。また、守備側は1プレーごとに、その相手チームの指導者にボールを返して、その指導者がスタンドティーにボールを置いた時点でプレーが再開します。このティーボールカテゴリーでは、外は皮で中が軟らかい素材になっているボールを使います。ピッチャー、キャッチャーは投球、捕球は行いませんが、そのポジションにつくことは可能です。

② プレインファンチル (9, 10 歳)



このカテゴリーになると通常の野球のルールに近づきます。ピッチャーもキャッチャーもつきます。1つだけ通常のルールと違う所は、3塁ランナーの本塁への盗塁が認められないことです。例えば、ランナーが3塁にいる場合にピッチャーが暴投、もしくはキャッチャーが後逸した場合、3塁ランナーは本塁へ進む権利がありません。しかし、2塁ランナーが3盗を試みて、捕手が3塁へ悪送球した際等は本塁へ進塁できます。

③ インファンチル (11,12 歳)



この年代になると、通常の野球のルールになります。もちろん、ベース間、投手と捕手の距離は年齢に合わせた距離に設定してあります。この年代から成人と同じ硬球を使用します。

以上、ブラジルの少年野球について、ある程度知ることができたでしょうか？私が指導するチームにはここまで紹介した12歳までのカテゴリーしかありませんが、その後も以下のようにカテゴリーが続きます。

13,14歳：プレジュニア (Pre-junior)

15,16歳：ジュニア (Junior)

17,18歳：ジュヴェニル (juvenil)

18歳以上～：成人 (adulto)

さて、ここで、今回のサブタイトルである～地球の裏側で根付く日本野球の野球文化～についてですが、なぜそのサブタイトルをつけたか説明したいと思います。ブラジルには戦前から戦後にかけて数多くの日本人が移住しました。移住した際には既にアメリカから野球というスポーツがブラジルには伝わっていたようですが、ブラジル各地に野球を広めたのは移住した日本人たちと言われています。それは、ブラジルでは野球が「beisebol」と呼ばれる他に「Yakyu」と現在でも広く呼ばれていることから分かります。それだけでなく「三振」も「Sanchin」、ゴロが「Goro」、試合と練習の開始時と終了時に「お願いします」「ありがとうございました」と整列して日本語で言うことなど、日本でも使われている野球用語が、現在ブラジル全体で使われていることから日本の野球文化が残っていることが分かります。指導の際、私もそういった日本語は使います。正に、色々な文化が混じった国であると感じます。私の住む街には、子ども・成人のチームだけでなく、高齢者の方も毎週野球の練習をしています。その練習中には日本語がかなり飛び交います。

日本では、野球人口が減っている状況ではありますが、私が住む町では野球を競技する子どもの数は増えつつあります。子どものチームのみでなく、大人のチームでもこれまで野球をやったことがなかった人たちがチームに参加するなど、徐々に人数が増加しています。その傾向が続いていけるように、日本の野球文化として残していけるものは残しながらも、日本的な「野球」とらわれることなく「Baseball」としてここブラジルでこれからも競技人口が増えていくことに貢献出来たらよいなと思います活動している現在です。

